

「農家の嫁さん」農の魅力発信

夫と二人三脚の31年 「やってきてよかった」

青々としたネギを手際よく選別していく。葛城市笛堂の作業場で飯田善美さん(56)が汗を流していた。農家の夫と結婚して31年。ブログやフォトブックで農家の日常を発信しながら、夫と二人三脚で青ネギをつくり続ける。

葛城・飯田善美さん ブログや写真本

黒滝村生まれ。高校入学と同時に橿原市に移り住んだ。市(現葛城)の農家の長男、康順さん(57)。口数が少なく、まじめな人だった。



善美さんは初めての農業に戸惑った。勤務時間は決まっておらず、天候をにらみながらの仕事だ。午前4時に起床し、くわの使い方や小型の農機具の使い方を覚えた。結婚の翌年に長男、その2年後には長女を出産した。子育てをしながら、農作業をこなした。

た。香芝市内の病院で手術を受け、3カ月間入院することになった。入院中は仕事や家のことが気になった。「おとうさんに負担がかかる。申し訳ない」と思ったが、康順さんは毎日のように病室に顔を出してくれた。

康順さんが大好きなビールを断ち、早く治るように願掛けをしているという話を、見舞いに来てくれた親類から聞いた。武骨な夫の意外な一面に涙が出そうになった。3カ月間の入院で、しみじみと家族のありがたみを感じた。

「お互い、相手のことを大切にするようにしました」

「青ネギ農家の嫁さん☆日記」(<https://ameblo.jp/anba715/>)。善美さんはそう題したブログを10年から続けている。8月下旬には「種まき、苗植え、散水」というタイトルで、作業の様子を写真と一緒にアップした。

今年、フォトブックも作ってみた。農作業を始める前に畑から見えた朝日や、出荷するネギなどをスマートフォンで写し、アプリを使って冊子にしたものだ。知人らに配った。



上 飯田善美さんと康順さん
下 青ネギを選別する善美さん
葛城市笛堂

フォトブック



うれしかったことや悲しかったこと、そんな日常をとてもおきたいという思いだ。そして何より、「農業の魅力」を伝えたいんです。

青ネギ農家に休みはない。若いころは出かけたと思うこともあった。構ってあげられず、子どもがかわいそうだと感じたこともあった。でも、今はこう思っている。

「ネギについた朝露が太陽の光でさらさら光るんです。そんな風景の中で生活していると、やってきてよかったな」

そんな善美さんのことを、康順さんは「近場でもいいから温泉に連れて行ってあげたいね」。照れくさそうに笑った。

(松永和彦)

道からはじまる ストーリー

ななりリビング
2007年
6月22日

【第七十七話】

「市場へむかう道」

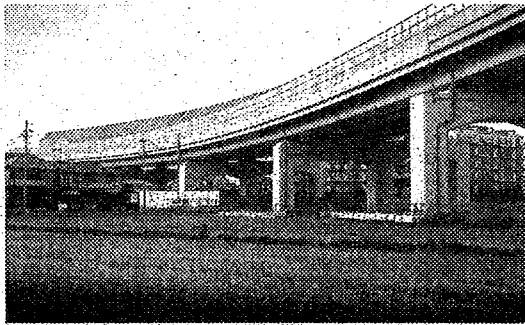
ちょうど一年前、主人から新しい道ができたから一緒に市場へ行こうと誘われた。し

色は、まるでジェットコースターに乗っているようだ。

高田バイパスから曲川を通り、橿原バイパス、そして京奈和自動車道へ。

思わずユーミンの歌を口ずさんでしまうほど快適なドライブ。今、私は郡山の中央卸売市場に向かって軽トラックを走らせている。旅行に出た主人に代わって、野菜を運んでいるのだ。

中央フリーウェイ
右に見える競馬場 左はビール工場
この道はまるで滑走路 夜空に続く



ぶしぶトラックに乗った私は今までと違うなめらかな車の流れに驚いた。奈良県にもこんなに立派な道路ができたなんて、信じられない。

時代は変わってきているんだなあと思感。

私が専業農家へ嫁いで20年。農業を取り巻く環境もずいぶん変化してきた。

すべて手作業だった野菜のアカ葉取りも、半自動、全自動の機械を使用するようになった。

田畑でも、くわではなく、エンジンのついた小型耕運機を使って、土を寄せたり、割ったりするようになった。

住宅地が増える中での農業は、住民と共存していくために、音や匂いや時間帯まで気を遣うようになった。

けれど農業の基本は野菜を育てること。心を込めて作った野菜を食べてくれる人たちがいると思うだけで、うれしくなってくる。そして、毎日の仕事にはりあいが出ている。

今日、私が市場へ持っていく野菜は、明日どこかのスーパーに並ぶ。どんな人が買っていくのだろう。どんな料理に使われるのだろう。

考えている間に京阪奈道も終わりに近づく。

さあ、あとひと走り。安全運転でがんばろう。

葛城市 飯田善美 45歳

応募方法

- テーマ 実在の奈良県の道を舞台とした心温まるストーリー
- 応募規定 400字詰め原稿用紙2枚(800文字)以内。未発表作品でオリジナル作品に限る。1人1作品
- 応募先 作品タイトル、名前、年齢、性別、職業、住所、電話番号、あなたが歩きたいと思う道、あったらいいなと思う道(具体的な理由も添えて)を明記し、原稿を同封の上、〒630-8686奈良市三条町606番地 奈良新聞社企画部「道からはじまるストーリー」係へ。<http://www.naraliving.com>からも応募可。
- 第21回締め切り 7月23日(月)必着
- ※個人情報 は適切に保護します。

★優秀作品

選考の上、心に響く作品を紙面に掲載。掲載者には商品券1万円を進呈します。

生活

奈良新聞

H22年 1月 9日 (土)

外仕事のご褒美

飯田 善美

さわやかな空の下、今日は畑で外仕事だ。前日にまいた種が、しつかり発芽したので、最初の肥料を置く。私は管理機で野菜の根元に溝をつける。その後、主人が背中に散布器を背負い、肥料を溝に落としていく。

わが家では最初の肥料を「チチコエ」と呼ぶ。赤ちゃんに与えるように、ゆつくり効くらしい。うまい言い方かなあと、あらためて思う。

二十数年前、私が嫁いできたころは、ほとんど手作業だった。義母がくわで野菜と2坪の幅を保ちながら、真つすぐに溝を切っていた。私はくわの持ち

方から教えてもらいながら、根を切ってしまうことも多かった。機械の登場で仕事の効率は高くなったが、私のくわ使いはへたなままだ。主人の祖父もくわ使いが上手だった。85歳を過ぎても、草を削り、畝を整えたりしていた。元気な姿が今も

雑記帳

題字は東大寺長老・故清水公照師

思い浮ぶ。

祖父母は大根や人参を作った。夏の水やりや、冬に川で野菜を洗うことの辛(つら)さを、野菜を選別する合間に話してくれた。父母は、キュウリや

トマトを作った。連作障害を避けるため、毎年ハウスを移動。大変な重労働だったと聞いている。

私たちは軟弱野菜を育てている。時代が移っても芽が出た時の喜びや、日々成長していく姿を見ることが農業の楽しみである。

痛くなってきた腰を伸ばし、顔を上げる。葛城山の美しい山の姿は、私にとっては、人間へのご褒美のように思えた。さあ、主人に追いつかないように、頑張って仕事を終えてしまおう。

(葛城市・48歳)

【投稿規定】身近な話題を600字程度に。タイトル、住所、氏名、年齢、電話番号を書いて〒630-8686奈良新聞社編集部「雑記帳」係へ。Eメールlife@nara-np.co.jpでも受け付け。字数や表現を整理する場合があります。

顔の見える野菜

近所のスーパーの農産物直売所へ野菜を出荷するようになって1年が過ぎた。

最初は内容量や値段をどうするか試行錯誤の日が続いた。けれど最近、市場の価格に左右されず、ほぼ一定量を置いている。

店員さんが開店準備をしている中、野菜を搬入してコンテナに並べる。時には他の農家の方に珍しい野菜の作り方や食べ方を教えてもらう。季節や地域の話に花が咲くこともある。

日によってお客様のいる時間に行くこともある。私が箱から

野菜を出していると、「もらえますか」と手を出される方。

キ
と
と
ひ

「他にどんな野菜を作っているんですか」と尋ねる方。直接消費者と出会える瞬間だ。

専門農家に嫁いで二十数年。農業の姿もずいぶん変わってきた。前は市場へ出

すのが主流だったが、近年はスーパーの卸売業者へ直接出荷したり、地域の朝市直売所へ個人が持ち込んだりするケースも増えてきた。時代の変化に応じて農家も創意工夫を重ね、野菜作りに切磋琢磨してきた。

朝早くから日が暮れるまで、土を耕し、種をまいて育てる。十分成長したところで加工して

袋詰めして消費者に買ってもらう。

どんな時代が来ても、食べる人がいる限り農業は必要だ。すべての人たちがおいしそうに食べる顔を想像しながら、草ひき、水やり、肥料置きをしている。

奈良県葛城市

飯田 善美

農業 48歳

■ 雑草との戦い

毎年この時期になると、畑は、農家と雑草との戦場になる。へらと小ぐわを使って草引きを始める。今年は雨が少ないので、スプリンクラーで水やりをしているが、作物と同じくらい雑草も水を楽しんでいる。

赤くて肉厚のある茎を八方に伸ばす「タコ草」、カニの腹に似ている「カニ草」、ヘリコプターのプロペラに似た葉を持つ「プロペラ草」なんて、勝手に名前を付けていると雑草にも親しみがわく。



きっと、農耕民族の日本人は、太古の昔から雑草と戦ってきたに違い。これから先、いくら新しい技術が開発されても、農業の機械化が進んだとしても、ロボットに草引きはできない。草と作物を判別できるのは、人間の目と手だけだ。なんて考えながら、痛くなってきた腰を伸ばしながら、畑を見渡す。まだ一畝の半分も済んでいない。やれやれ、道はまだ長い。日も傾き、やっと吹く風に涼しさが混ざるようになってきた。

直線の根を持つ草は、くわなどで削ると枯れてしまうが、何本もの根を八方に広げる草は、すべての根を取り除かなければ、また復活してしまう。恐るべき生命力よ。

これからは暑さも加わって、外の作業もしんどくなってくる。まあ、ぼちぼちいこか。千里の道も一歩から。百姓の基本は草引きから。さあ、もう少し頑張ろう。

奈良県葛城市

飯田

善美

農業・43歳

新

日

新

1997年(平成9年)6月11日 水曜日

運ハもリ日時はフ、員一かヤ 口伸て反口か、不、口ワしのな不

● 腰痛の教え

突然、腰痛になった。

良うなりよ」と言ってくれ
る義母に頭が下がる。

初めは曲げた時に痛みを
感じるだけだったのが、次
第にひどくなり、いすに座
っていても、くしゃみをし
ても神経に響くほどになっ
た。病院へ行ってCTスキ
ヤンの検査も受けたが、異
常は見つからず、原因はわ
からなかった。

二度の注射を受け、毎日
湿布薬を張り、ローラーで
腰の指圧をしたためか、少
しは痛みも和らいできた。
けれど本当に必要だったの
は、時間だったような気が
する。

専門農家に嫁いで十年あ

まり、早く仕事に慣れよう
と頑張ってきた。く

わ使いも、重い機械

を使う仕事も、でき

るだけやってきた。

けれど農業という仕

事は随分と体に負担がか

かるようで、一昨年九十歳で

亡くなった祖父母は、二人

とも腰が曲がっていた。

「百姓は牛のよだれや」

が口癖だった祖父母は、あ

まり無理をせず、ぼちぼち

働くことを勧めていたのか

もしれない。これからは私

母に負担がかかる。それで

も「ゆっくり休んで、早く

事を続けていこうと思う。

農繁期の今、私が畑の仕

事にいけないため、夫や義

母に負担がかかる。それで

も「ゆっくり休んで、早く

事を続けていこうと思う。

農繁期の今、私が畑の仕

事にいけないため、夫や義

母に負担がかかる。それで

も「ゆっくり休んで、早く

事を続けていこうと思う。

農繁期の今、私が畑の仕

事にいけないため、夫や義

母に負担がかかる。それで

も「ゆっくり休んで、早く

事を続けていこうと思う。

農繁期の今、私が畑の仕

事にいけないため、夫や義

母に負担がかかる。それで

も「ゆっくり休んで、早く

事を続けていこうと思う。

奈良県新庄町

飯田 善美

農業・35歳

務局長は「エネルギー問題に」

暖かい冬

冬が寒かった昨年は、農作業が
つらかった。朝、気温が下がり、
霜もおりたまま。腰と足にカイロ
を張って、カッパを着て野菜を取
り込んだ。低温が続いたため、成
長も遅く、寸足らずの姿。土まで
凍てついて、ひっぱると根がちぎ
れてしまう。下を向いて野良仕事
をしていたら、ちらちらと雪が舞
い、顔を上げると山からふぶいて
くる。

それに比べると、今年は暖かい
こと。

きのう きょう

この冬、トラクタ
ーで野菜を踏みつぶ
している映像が流れ
た。それを見た消費
者は一斉に「もった
いない」と。でも、
一番強く感じている
のは、野菜を作って
いる生産者だ。土作りから始まり、種
まき、肥料、水やり……。やっと出荷す
る段になって、生産過剰とは、なんと
もやりきれない。

けれど、農家は野菜を土
に返して、もう一度やり直
す術を心得ている。気候に
左右される仕事だけれど、
暖かい冬は、体にとっては
ありがたい。

今年は、種まきも早まる
だろう。そろそろ忙しくな
る。

奈良県葛城市

飯田善美 45歳 農業

◇「きのうきょう」への投稿を募集しています。
原稿は500字程度にまとめ、〒556—8660 産経新聞
文化部「きのうきょう」係（FAX06・6633・194

0）へお送りください。採用分には薄謝を進呈しま
す。本紙の別の欄や他紙への二重投稿はご遠慮くだ
さい。

んは話していた。

—624—

産経 H6
9.9

きょう
きょう

幼稚園年長組の息子は、
畑へ出るのが大好きだ。専
業農家の長男として生ま
れ、つかまり立ちができる

てうねの修理をしているの
がよほどおもしろそうに見
えたのか、早速おもちゃの
プラスチック製のクワを持
ってきて「お母さん、どな
いするのか、教えて」と言
って、私の隣のうねを耕し
始めた。

ようになったころから、私
が外で仕事をする時には、
畑へ連れて行ったせいにも

こんな風に農業に興味を
もってくれるのも幼いうち
だけで、大きくなったら見
向きもしなくなるののだら

砂場より畑が好きな息子

う。息子
が自分の

しれない。

景色が見えるのがうれし
いのか、飛行機や鳥や風に
さえ喜んだ。歩けるように
なると、スコップやバケツ
を持って砂場代わりに畑
へ。もっと大きくなると、
運動場のように端から端ま
で走り回った。

仕事を決めるころには、農
業をしている人もずいぶん
少なくなっているだろう。
けれど今は、家族が汗を流
している姿を見ていてほし
い。

私が手伝おうとすると、
「お母さんはあっちへ行っ
て。僕こそしておくから」
という息子の背中を見て、
少し頼もしく思えた。

先日、休みで朝早く起き
た時には、わざわざ一キロの
道程を、自転車を迎えに来
てくれた。私がクワを使っ

奈良・新庄町
飯田 善美 32歳

約
6.5
ホッ

★
関西デ
ピンク
45分
者に安
★ハ
商品名
号、電
名、電
大阪中
関西デ
ング
5日後
★電
00二
きょう
4時ま

毎日新聞

2008年
4月24日(木)

新しい長靴

新しい長靴をおろした。パス
テルグリーンのきれいな色、同
色のリボンも可愛い。畑へ行く
のに、つい足取りも軽くなる。

専業農家に嫁いで二十余年、
3夫婦同居は10年ほど続いた。
祖父母は大根やニンジンを作っ
ていた、と聞かされた。種をま
いた時や芽が出た時、井戸から
水をくみ、野菜に水まきをする。
夏の炎天下、さおをかつぎ、前
後におけをぶら下げ、何回も往
復する。「あの時はしんどかつ

女の気持ち

たなあ、おばあさん」と話す祖
父の顔は、昔を懐かしんでいる
ようにも見えた。

父母はビニールハウスでキュ
ウリを栽培した。連作障害が出
るので、毎年ハウスを移動しな
ければならない。鉄パイプの柱
は重くて、一家総出の大仕事だ
ったようだ。

私たちは露地で軟弱野菜を育
てている。水やりはスプリンク
ラーや発動機を使い、ハウスを
建てることもない。農作業の多
くは機械化されている。

しかし、作業の仕上げは人間

の手と目が必要だ。畝を盛った
最後には、スコップやタワで水
はけをよくしなければならな
い。草と野菜を見分けて草取り
をする。出荷の箱詰めは数えね
ばならない。作物が変わっても、
時代が変わっても、農業の基本
は人が動くこと。祖父母や父母
も、自ら働く姿を見せて次の世
代に教えてきたのだろう。

新しい長靴とともに、22年目
の春が始まる。田畑が私を呼ん
でいる。

奈良県葛城市

飯田 善美 農業・46歳



2007. 8.

サマータイム

サマータイムが始まった。朝5時、軽トラックを走らせると、あちこちの田畑に人の姿。太陽は高く昇っている。遅くなったことを気恥ずかしく思いながら、野菜の収穫を始める。

20年前、専業農家へ嫁いで一番驚いたのは、朝が早いこと。私が目覚めると、主人と父母は畑へ出ており、祖父母も庭の草取りや仕事場の段取りをしている。あちゃーと焦ったことを昨日のように思い

女の気持ち

出す。

私も少し前まで、種をまけば野菜ができると思っていた。けれど、実際は土作り、うね盛り、草取り、消毒と何通りもの世話をし、出荷できることが分かった。猫の手も借りたほど忙しい今の時期、日中の暑さのことを考えると、朝早い時間帯は気分良く仕事ができる。

とはいえ、これからは昼に近づくにつれ、炎天下となる。その上、主人から小型耕運機を使っの作業を仰せつかった時には長袖、長靴、首にタ

オル、つばの広い婦人帽のすそをぎゅっと結び、勇気を出して畑へと向かう。まるで戦場に出る兵士の気分。

この仕事を終えると、冷蔵庫の冷えた麦茶が待っている。そして短いけれど、私の大好きなシエスタの時間もあとひと頑張り、ひと頑張りと思いながら夏を生きている。

奈良県葛城市

飯田 善美 農業・45歳

◇投稿規定 約600字。

〒530-8251 (住所不

要) 毎日新聞気持ち係まで。

2007.11.21

忘れ物

最近、物忘れが多くなった。冷蔵庫を開ける。何を取り出すとしたのか。扉を開けて、卵と思い出す。

2階へ上がる。何の用だったか。台所へもどり、布団を取り入れるためだったことを思い出す。

財布がない。昨日の買い物時は確かにあった。車の中、ポケット、テーブルの下。最後には、スーパーに電話をした。しかし見つからない。

女の気持ち

家事だけではない。先日、主人が不安そうに聞いた。

「この前、おまえが種をまいた畑で、芽が出てない畝があるんやけど」

急いで見に行く。きれいに発芽した畑のうち、一筋だけそのまま。種をまき忘れたとしか考えられない。ぼうぜんと立ちくらんだ。このまま、意識がまだらになっていくのだろうか。

私の父母は死ぬまで意識がしっかりしていた。2人とも亡くなる前日まで私や孫を心配してくれた。それに比べて私は……。

ふと顔を上げると、金剛・葛城の山が見えた。きっと日本列島が誕生した時から、この地で人間の生活を見ていたのだろう。泰然自若としたありさまは、私の不安をも受け入れてくれるような気がした。

私も、ありのままの自分を生きていこう。

そう思った次の日、特売の力uppめんが入ったスーパの袋から、財布が静かに見つかった。

奈良県葛城市

飯田 善美 農業・46歳

2006.7/8

6.14

夕焼けエッセー

今年もペアのツバメが来た。仕事場の電灯のかさに土を運んでいる。

私は、広告の紙をのれんのようにガムテープではりつける。せつかく見つけた場所です巣作りができなくなったため、2羽はくると旋回している。

すでにわが家には、納屋に2つ巣がある。

仕事場の中では、野菜の出荷作業をするため、鳥のフン害はいただけない。

今日も、ぶらさげた広告の紙のすき間に巣作りを始めた。私は天井を見上げて、ほろほろ土を振り上げた。土をくわえたツバメと目が合った。

ツバメは顔中泥だらけであった。その瞬間、なぜか、私の記憶の中の父と母が現れた。

父は手ぬぐいを頭に巻き、乗馬ズボンに地下足袋、母もモンペ姿と、2人とも仕事着を着ていた。

山と畑の仕事をしながら、6人の子供を育てた。山間部から高校まで通えないので、子供たちのために町に家を建てた。皆、短大、大学まで卒業させてもらった。母は15年前に、父は昨年この世を去った。泥だらけのツバメは、元気だったころの両親を思い出させてくれた。懸命に巣を作っている姿は、鳥も人間も同じ親の姿だった。

巣を作るのを許すべきか、否か。私の複雑な心境を知っているかのように、今日もツバメは仕事場の天井を飛びまわる。

あなたのエッセーを募集しています。600字にまとめ
〒556-8661産経新聞編集局「夕焼けエッセー」係まで。

ラジオ大阪(1314kHz)で毎週月曜夜7時ごろエッセーを放送中

ツバメの巣作り 飯田 善美 44 農業 奈良県葛城市